

『素粒子論研究』とのつきあい

小沼通二 元編集長，慶應義塾大学名誉教授，mkonuma@keio.jp

1 はじめに

ぼくが『素粒子論研究』（以下素研と略）の編集長を務めたのは，48巻1号（1973年9月）から，途中が途切れながら，63巻2号（1981年5月）までだった。当時は京大基礎物理学研究所（以下基研と略）の助教授だった。30年以上たってから2015年に橋本幸士さん（当時阪大）が編集長になり，編集委員会制度を作り，編集委員を集めたときに声を掛けられ，編集委員を引き受けた。2018年には森田健さん（静岡大）が後を継いだのだが，その後も編集委員を務め今日に至っている。こういうわけで今回の75周年企画の関係者でもあった。

昨年企画を議論したときに，編集委員会が歴代編集長に執筆をお願いすることにしたのは，25周年記念号の特集の中で元編集長に執筆をお願いしたことがあり，後に残るいい証言になったことが記憶にあったためだった。

今回の企画を始めたときには，自分自身が執筆者になることは考えていなかった。忘れていたことが多かったためと，25周年特集を編集長として作り，50巻までの総目録作成にかかわり，冊子版の最終号（119巻4C号，2012年2月）には勝手に冊子版終焉へのオマージュと将来への期待を書き，その直後の素粒子論懇談会には，電子版を素粒子論グループの機関誌にすることを提案して認めていただいたことがあったので，今更書くことは残っていないと思ったためである。ところがその後，編集長時代の素研などを手に取る機会があり，編集後記などを読んだところ，次々に思い出すことが出てきたので，ここに書かせていただくことにした。

2 素研との出会いと最初の執筆

素研との最初の出合いは，1952年かそれ以前に物理図書室か素粒子論研究室に出入りしたときなのだが，全く覚えていない。

はっきりしているのは，定期購読を始めた71年前のことである。最初に受け取ったのは大学4年生のときで，「夏季ゼミナールの為の予稿(7月21日より8月1日迄 京都湯川記念館にて開催)」と題する4巻7号（1952年7月）だった。この号は，湯川記念館の開館^{註1}に合わせて全国から参加者を集めて開催されたセミナーの予稿だった。この会につ

註1 湯川記念館開館は1952年7月。基研発足は1953年8月で，それまでの湯川記念館は，建物の名前だけでなく，京大の学内措置でできた研究機関名でもあった。

いて、翌月号には「湯川記念館夏の学校」と書いてあり、追加の講義、中間子討論会の記録、懇談会の記録なども載っている。懇談会の記録の中にはこの会の性格が、「啓蒙的な方向を中心とした“学校”と、仕事の促進を目的とするきわめて専門的な“セミナー”の形式の折衷案」だったと書かれている。“校長先生”は片山泰久さんだった。忘れていたけれど、当時こういうものを眺めていたのだった。

なお当時の素研は手書きの謄写版印刷だった。謄写版印刷とは目の細かい鉄のやすり板の上に置いた蠟（ろう）を塗った原紙に鉄筆で文字やグラフを書いて、そこに空いた小さな多数の穴から染み出すインクで印刷する方式だった。鉄と鉄がこすれてガリガリ音を立てるのでガリ版とかガリ版印刷といった。手書きからタイプ印刷に変わったのは 1958 年の 17 巻からだった。

素研にぼくの名前が初めて出てくるのは、7 巻 6 号（1955 年 1 月）である。西島和彦さんの「基研における V 粒子の研究報告」(p.640～)のなかに次のような記録が残っている。

（1954 年）11 月後半基研において B e V 現象と共に V 粒子について皆で議論したことについて簡単に報告する。V 粒子の問題について先ず

（1）実験の整理

V 粒子については実験データの整理が必要であるので、最近のデータについて小沼の報告があった。・・・実験の整理については小沼の報告が素研に出る予定である。

ここに書かれているぼくの報告は 7 巻 7 号 p.760～779（1955 年 2 月）に掲載されている。初めて書いた素研の文章である。大学院マスターコース 2 年だった。西島さんの報告は少人数での 2 週間の研究会についてのものだった。ぼくは基研 2 階（現在の湯川記念館棟）の研究室に泊まるように指示された。3 階にあった大講義室が、消防法規との関係で維持できなくなった後の大講義室として中庭の芝生があった場所にできたパナソニックホールがまだなかっただけでなく、北側のウイングもなかった時代の話である。白川学舎（現在の北白川学舎の前身）もまだなく、ビジネスホテルもなかった。研究室にはベッドが 2 つずつあったと思う。地下には風呂もあり利用した。ぼくが宿泊するように指示されたのは、2 階の木庭二郎さんの研究室だった。朝になって木庭さんが現れたので、「木庭先生、小沼です」とあいさつしたところ、「先生ではない。研究者は対等なのだ。木庭さんといいなさい」といわれ、最初はオズオズと、のちには自然に木庭さんと呼ぶようになった。次に参加した基研研究会のときには大徳寺の大部屋に貸布団を並べて泊まり込んだ。百萬遍知恩寺に泊まったこともあった。

この素研報告については 3 つの後日談がある。

第 1 は、数か月後に基研所長の湯川先生からお手紙をもらったことである。近く講演をするときに新粒子の話もしたいので資料作りを手伝ってもらえないかといわれたのであった。もちろんお手伝いをした。出来上がった資料は、当時湯川先生が東京の定宿にしてい

た四谷の紀尾井町にある福田屋の玄関までもっていった。和服で玄関に現れた先生が正座をして対応されたので恐縮したのは、この時だったか、もっと後の別の機会だったか覚えていない。それ以後湯川先生とはお亡くなりになるまで、双方向のお付き合いをさせていただいた。

第2の後日談は、この素研原稿をもとにして日本物理学会誌 10 巻 12 号(1955 年 12 月) 437~452 に「新粒子研究の現状」と題する実験と理論に関する解説を書く機会を頂いたことだった。若手のぼくに、いまでは考えられないページ数の長文報告を書く機会を与えてくださった経過は、わからない。

第3は、最近の話である。日笠健一さんが、田中純一さんと一緒に書いた解説「素粒子データブック」(高エネルギーニュース 41 巻 2 号 75~79 ページ 2022 年)のファイルを知らせてくれた。素粒子データブックは、この二人を含む国際的な Particle Data Group が作成してきた正式名称 Review of Particle Physics のことであり、このグループの活動とその内容の紹介である。ぼくはこのグループの活動を最初から注目してきたので、興味深く読み、上に書いた素研と物理学会誌の「新粒子」についての拙文の情報と、これが、早川幸男さんと西島和彦さんが日本物理学会誌 (8 巻 75 ページ, 1953)に書いた解説と藤岡伍郎さんが素研(5 巻 1277 ページ 1953)に書いた解説に続くものであることを知らせた。日笠さんは、Particle Data Group の活動のルーツが 1957 年だったのに、それ以前に実験と理論についての解説が日本で作られていたことを、興味をもって評価してくれた。

3 編集長として

ぼくが素研編集長を務めたのは、1973 年から 1981 年までの間の 22 冊であり、そのすべての号に編集後記を書いている。編集部が関係した企画やお知らせや編集後記を見ながら、当時の雰囲気を描き出してみることにする。

1973 年

8 月号 47 巻 6 号

編集後記

・・・この夏、編集子は Bonn で開かれる Electron-Photon Conference に出かけますので、9月号と10月号の編集を M.K.氏にお願いすることになりました。このところ基研所員の数が一時的に少なくなり、とうとう M.K.氏まで「素研」編集にかり出され、お気の毒ですが、よろしくお願いします。・・・ (T.M.)

ここに出てくる「M.K.氏」がぼくで、「T.M.」は牟田泰三さん。

9 月号 48 巻 1 号

放談室 「素研」のあり方についてのアンケート結果

素研編集部

・・・

(T.M., 一部 M.K.が加筆)

編集後記・・・編集長 T.M.氏が、短期間ではありますが、外国出張に出かけましたので、私が、初めて編集の仕事に携わることになりました。・・・ところで早速ですが、・・・規定から外れた原稿が少なくありません。・・・これが印刷経費の増加・発行のおくれなどに直接響いておりました。・・・ここしばらく素研の発行が遅れていて申しわけありません。6月号が完成して編集部に届いたのが、8月16日です。早急におくれをとりもどすよう努力しております。・・・

(1973年8月20日、小沼通二)

この号に報告されたアンケートは、福田礼次郎編集長時代のこの年の5月末に全国の素粒子論研究者に向けて発送したものであり、素研内容の改善と財政危機を乗り越えるために行われたものだった。結果をまとめた責任者として最後に名前が載っているのは7月に2度目の編集長になった牟田さんだった。そこには一部加筆したとしてぼくの名前が見えるが、ぼくはアンケートの準備と集計には関係せず、素研に掲載されたときの編集長として読ませてもらって、牟田さん(たち?)の同意を得て、加筆したのだった。

「放談室」とは、山崎和夫編集長が就任第一声として、1955年5月号(8巻1号)の編集後記で、素研には物理以外にもなんでも投稿してもらって、素研愛読者の通風口にしたいと呼びかけたのを受けて、次の木庭二郎編集長が就任後最初の号(1955年12月号、10巻2号)で開設したものだ。

編集後記には、投稿者への投稿規定順守のお願いと発行の2か月の遅れのことが出てくる。この二つは、この後でも繰り返し取り上げることになった頭の痛い問題だった。素粒子論研究は、計画的に原稿を依頼する雑誌でなく、基本的にレフェリー制度もないので、受け取った原稿は特に問題がなければすぐに印刷に回すことになる。翌月以後の投稿数がわからないのだから、投稿が多いからといって、翌月に回したのでは、解決にならない。数式や図表や外国語がある原稿なので、どこの印刷屋さんでも引き受けてもらえるというわけではない。投稿件数が増え、投稿規定を無視した原稿があれば、印刷者と校正者の負担が増加して、発行の遅れにつながることになる。

研究者が増加し、研究が活発になるのは歓迎すべきことなのだが、計画を立てられない雑誌の編集長としては喜んでばかりではなかった。

実際、吉田思郎編集長時代の1953年に平均110ページで1冊と決めてからは、1か月に2回、3回発行されたことが繰り返された。磯親編集長時代の1958年に月刊定期刊行物としたところ、岩崎洋一編集長時代の1970年7月の41巻5号は37ページ、翌1971年4月の43巻2号は528ページという記録になった。

10月号 48巻2号

放談室 特集 25周年をむかえた「素粒子論研究」・・・

お知らせ 素研の値上げ（1973年4月）・・・

編集部

編集後記 通巻316号、25周年記念号をおとどけします。今月号の部数は680部です。・・・

今回は、素研を支えている人たちをご紹介します。編集長の周辺にいる研究者の方々、特に基研の所員は、いつも相談に乗ってくれます。理論物理学刊行会の中島常幸さんは、会計を引き受けてくれています。刊行会の部屋に一日おきに来てくれる福原真知子さんは、素研と物性研究が共同で事務をお願いしているお嬢さんです。さらに、高塚重則さんほか、刊行会の皆さんが協力してくれています。印刷は20年来倉本作雄さんのところと京大生協印刷部にも関係している田村俊一さんの昭和堂印刷が協力してやってくれています。京大理学部の良い人たちは、校正をしてくれます。そして、最後になりましたが、読者の皆様の支持が、25年間素研をささえ続けてきたのです。・・・

追記

木庭（二郎）さんが、コペンハーゲンで、9月28日におなくなりになりました。つつしんで御冥福をお祈りいたします。この号にいただいた原稿が絶筆になるとは、夢にも思っておりませんでした。9月14日づけで「浄書の上で9月17日に速達便で・・・発送します」というお手紙がとどき、15日づけの「病床にて」とある「素研創刊のころ」をいただきました。原稿の一枚目と二枚目以下の加筆訂正の部分とがご自分の筆跡でしたが、これほどの急変を予想することは全くできませんでした。昨年アメリカでお目にかかった時には、数年前にコペンハーゲンでお世話になった時よりも、かえってお元気そうでしたのに。 (1973-9-30 小沼通二)

この号は、今からちょうど50年前の25年記念の記念号である。表紙には、中央に上田顕さんがデザインしたマークがあり、左下に

25周年記念号

通巻316号

1948年10月創刊

と書かれている。内容は、元の編集長たち10人のエッセイと25年間の記録である。創刊時の様子は木庭二郎さんと中村誠太郎さんが書いてくださった。エッセイの中には、1952～3年から素研の印刷と定期購読者への発送までやっていた倉本印刷製本の倉本作雄さんの貴重な思い出もある。このほかに、編集部（M.K.）がまとめた「素粒子論研究の歩み」の資料がある。これは、第1表 素研の記録（25年間の各号の発行年月、ページ数、編集責任者、その他）、第2表 素研のページ数（巻ごとの合計ページ数、発行期間、1か

月あたりのページ数)そしてそのあとの1か月あたりのページ数のグラフからできている。

印刷に間に合わず積み残した2人の元編集長の文は翌月号に掲載された。

編集後記には、素研の発行を支えてくれている「縁の下の力持ち」(あ、これは死語か)の人たちの紹介を書いている。編集後記を書き終わったときに、原稿を送ってくださったばかりの木庭さんの訃報が届いて驚き、まだまだ活躍していただけたらと思っていただけにと残念だった。

11月号 48巻3号

放談室

特集1 木庭二郎氏を悼んで

野上茂吉郎・早川幸男・並木美喜雄

特集2 25周年をむかえた「素粒子論研究」(続)

お知らせ

素粒子論研究の値上げ

・・・どうしても始め(ママ)にあげた値段にせざるを得なくなりました。しかもこれには条件がついています。滞納者がいないとしています。読者数が減れば、すぐ成り立たなくなります。・・・滞納しないでください。購読をやめず、一人でも読者を増やすように協力してください。(M.K.記)

新着文献案内欄の廃止について 素研編集部

・・・素粒子論懇談会でお認め願った通り、新着文献案内は今月号から素研に載せないことにいたします。・・・具体的にご不便を感じられる方は、編集部にご相談ください。

編集後記

(1) 木庭二郎さんの追悼文を、関係の深かった三人の方々にお願ひしました。

・・・

(4) 9月号のアンケートの結果を見ても、学会の時の素粒子論懇談会でのご意見をきいても、編集部がもっと積極的に、読みたくなるような素研をつくっていくことに努力せよというご発言が見られます。(M.K.記)

「新着文献案内」には、基研が受け取った preprint などの情報が木庭編集長時代の1956年1月号(10巻3号)から掲載されてきた。希望者にコピーサービスがおこなわれた時期もあったが、各研究室の研究条件がレベルアップされるにしたがって利用者が減っていった。アンケート結果を分析して廃止に踏み切ったのだった。

ここまでの3号は牟田編集長の海外出張中の代理だったから、牟田さんの帰国に合わせて編集長をお返しした。

1974 年

3 月号 49 巻 1 号

編集後記 12 月 (1 月号) 以来毎月編集会議と称するものを開いて、「素研」の運営、財政、企画等について話し合っていますが、そのメンバー (M.K. 及び T.M. それに N 氏と F さん) に今度新たに京大物理教室から M.K. 氏が参加して下さることになりました (基研の M.K. 氏と区別するために今後 MK-II 氏とでも呼んだらいいでしょうか)。これからは、この編集後記も三名の編集委員が交代で書いたらもっと面白くなるだろうと思います。・・・ T.M.

ここに登場する M.K.II 氏は小林誠さん。N 氏と F さんは、理論物理学刊行会の中島常幸さんと素研編集部勤務の職員福原真知子さん。

この編集後記に牟田さんが書かれた事情により、この年の素研の編集後記は、T.M. さんが 7 回、M.K. が 2 回、M.K.II さんが 3 回書いている。

7 月号 49 巻 5 号

編集後記 今月号は、受け取った原稿の 3/4 を積み残して、ごらんのとおりのスタイルとなりました。・・・これは、財政状態に非常警報が出たためです。・・・去る 4 月の素粒子論懇談会で、編集部から、秋までできるだけ努力するが、やむを得なければ薄い素研が出ることもあるかもしれないと申しましたが、ついに限界に達しました。これは昨年秋以来の印刷費・紙・人件費の急激な上昇と、日本中の大学予算の実質的減少と公務員の定員削減の影響を受けた基研の財政悪化によるものです。・・・読者に経費を負担してもらおうとすると、素研の定価を倍増しなければなりません。・・・ (Mi.Ko.)

「ごらんのとおりのスタイル」と言われても、手に取っている読者以外にはわからないと思うが、研究会報告は 3 ページ、本文は 73 ページだけという薄さである。経費の急激上昇と大学予算の実質的減少、公務員の定員削減など、今と同じような問題が起きていたのだ。

11 月号 50 巻 3 号

編集後記 ・・・編集段階で手もとにある原稿は・・・でしたが、ご覧の通りしかのせることができずあとはふたたび積み残しになりました。関係者におわびいたします。・・・9 月号からのサイズ変更は、値上げ防止対策でした。それに伴って、表紙のデザインを変更する必要が出てきて、河辺六男氏にお願いしました。一般に評判はよいようです。・・・今月号の有料部数は 720 部に達しました。部数が増えて、財政に余裕が出れば、いろいろな企画を考えることもできます。・・・ (Mi. Ko.)

この号のページ数は、研究会報告が 41 ページ、本文が 39 ページだった。

河辺さんは、ニュートンのプリンキピアのラテン語からの翻訳をおこなった経験（河辺六男責任編集『ニュートン 世界の名著 26』中央公論社、1971 年）があり、デザインや油絵を描く才能ももっていたことが、表紙のデザインにも反映している。表紙のデザインは、四隅にラテン語の格言とそれぞれに関係する絵が描かれている。格言を左上から右回りに英訳すると、Nature is abundant. Nature is simple. Nature does not jump. Nature is beautiful. となる。この表紙は、今でも素研のウェブサイトの序論にある「冊子体の表紙の変遷」で見ることができる。

<https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~soken.editorial/soken-cover.html>

1976 年

3 月号 52 巻 7 号

総目録 創刊号（1948 年 10 月）— 50 巻 6 号（1975 年 2 月）

まえがき

・・・数年前に、歴代の編集長に、素研の歴史や思い出を書いていただいたことがありましたが、創刊以来の素研を見ていて、こんなおもしろい論文がのっていたのかと思うことがしばしばでした。素粒子論グループの組織が形成されてきたころの歴史の証言、さらに重要な海外通信、意見や提案、講義や翻訳など、素粒子論グループの歩みそのまま残されていることにあらためて目を見張る思いでした。

そのため、編集部の周辺で、この際総索引をまとめておくべきだという声が高まり、一年間の準備の結果この総目録をおとどけするに至りました。・・・

素粒子論研究編集部

総目次

人名索引

あとがき

この総目録作成には、多くの方々の御協力を得ました。初期の段階で協力された牟田泰三氏、素研編集部に 1976 年 3 月まで勤務され、この総目録作成作業の中心となってくれた福原真知子さんに心から感謝いたします。・・・

編集委員 植松恒夫 小沼通二 小林誠 福田礼次郎

機械化され検索も容易になった今では想像しにくいと思うが、すべて人力で作成したのだった。インターネット時代の今日でも、非常に便利に使うことができる。

この号が刊行された時期の編集長は植松さんだった。

1980 年

1月号 60巻4号

朝永振一郎先生追悼特集号

あとがき

この特集号において、素粒子論研究が創刊された1948年秋からの朝永先生の研究生生活を、多くの方々のご協力によってうかび上らせることができたとすれば、編集部として大変よろこばしいことである。この企画を公け(ママ)にしてからすでに数か月がたち、年があらたまってしまった。・・・時間をかけたため、よりよくなった点も少なくないことをお察しいただきたい。

末筆になったが、京都の東山にお眠りになる朝永先生のご冥福をお祈りし、この特集号を先生のご霊前にささげさせていただきたいと思う。

素粒子論研究編集部(M.K.)

この時期に、先に述べた編集会議が続いていたかどうか記憶がないのだが、植松編集長の周辺で、朝永先生と一番長いお付き合いがあったぼくが、あとがきを書いたことに違和感はなかった。朝永先生がお亡くなりになった1979年7月8日に、ぼくはたまたまコペンハーゲンのニールス・ボーア研究所を訪問中だった。基研からテレックスが届いていると電報局から電話を受けたときのことは、今でもよく覚えている。すぐに所長のオーゲ・ボーアに知らせ、研究所にいた日本人8人の連名で弔電を打った。ボーア所長と我々の2つの弔電は『回想の朝永振一郎』(松井卷之助編、みすず書房、1980)に掲載されている。

ついでに書いておくと、1981年に湯川先生がお亡くなりになったときには、ぼくは日本物理学会誌の編集委員会の京都からの支部委員であり、特集「湯川秀樹博士追悼」を荒船次郎さんとともに担当し、自分自身でも、河辺六男さんと連名で「中間子論の誕生」を書いた(日本物理学会誌37巻4号、1982年4月号)。

3月号 60巻6号

編集後記 前号までの編集長の植松恒夫さんが DESY に行かれましたので、後を引き継ぐことになりました。・・・

1980年2月29日 小沼通二

ぼくはこの時から15か月続けて編集長を務めた。([「素粒子論研究」の50年](1999年11月号、100巻2号)の133ページには、創刊以来の素研編集長と編集した巻号の表が掲載されていて、ぼくが60巻全体を担当したと書かれている。実際にはここでみられる通り、ぼくが担当したのは4、6号であり、そのほかの号を編集したのは植松さんだった。)

4月号 61巻1号

編集後記 前編集長から引き継いで早くも1か月经過しました。・・・

(1080・3-21(ママ), M.K.)

5月号 61巻2号

基研シンポジウム「基礎物理学研究所の将来と物理学」・・・

編集後記 この号には、昨年11月に基研でおこなわれたシンポジウムの記録をのせることができました。10年おきに小川さんがお書きになっている放談室の対話篇の第3回も送られてきました。

研究会報告の原稿も次々に送られてきています。投稿が多いことはうれしいことですし、そうでなくては、素粒子論グループの面子にかかわることなのですが、編集部では、しのびよるインフレの気配の下で、どう対処すべきか、議論を始めています。・・・昨年度は赤字でした。値上げはしたくありませんので、皆様の周囲の方々に購読をすすめてくださるよう、お願いします。

それとともに、できるだけ魅力のある原稿を投稿してください。機関誌は、グループのメンバーの支えによって発展していく以外に途はないのですから。(ついでにお願いします、投稿規定を守ってください。印刷屋さんや校正者の負担を減らし、ミスプリントを減らし、発行のおくれをとりもどしたいと思います。・・・)

相変わらず、発行がおくれています、できるだけおくれをとりもどすよう努力中です。

3月末まで編集を手伝ってくれていた谷原ふみ子さんがおやめになりました。新しい職場でのご多幸を祈ります。そのあとには、1年半ぶりにケンブリッジから帰国された武田久子さんが、ふたたび手伝ってくださることになりました。 編集部 M.K.
小川さんは小川修三さん。

この編集後記から、関心は、相変わらず投稿規定を守らない原稿が送られてくることと刊行の遅れであり、送られてくる原稿の量に一喜一憂していたことがわかる。

6月号 61巻3号

編集後記 この一月ほどの間に、ニュートリノに質量が見つかったというニュースが、いくつかのルートで入ってきました。今では、いくつも関連するプレプリントが入ってきていますが、その前にテレックス、手紙、新聞(ニューヨーク・タイムスの切りぬき)などが、基研にも届きました。そのいくつかを、発行の遅れている、前の号の素研にのせることにしました。

相変わらず、発行のおくれがあつて、著者と読者に申し訳ありません。刊行予定に近づけるよう努力中です。 (1980.5.20 M.K.)

7月号 61巻4号

放談室 「開館の年の湯川記念館」(資料) . . .

編集後記

梅雨のあい間の日曜日に、基礎物理学研究所の遠足で、奈良の西の京と山の辺の道に行ってきました。ちょうど、唐招提寺の御影堂の特別公開の日だったので、8世紀の鑑真和上座像と、完成したばかりの東山魁夷のふすま絵をみることができました。そのあとで、桜井市の阿部文珠院で、朝永振一郎先生のお書きになった万葉碑に立ち寄りしました。この碑については、みすず書房の「回想の朝永振一郎」(1980年7月)の、竹内柎、馬場一雄両氏の文をごらんください。

湯川先生の万葉碑も、多武峰の八井内にあるそうですが、今回はそこまで足をのばす時間がありませんでした。

ところで、1月号のあとがきでちょっとふれたため、問い合わせがいくつもありませんでしたので書いておきますが、朝永先生は、京都の丸山公園のすぐ南の東大谷に、ご両親とご一緒にお眠りになっています。

あわせて書いておきますが、坂田昌一先生のお墓は、ご郷里の山口県柳井市岩休寺にあります。柳井駅から南に6キロほどの阿月の手前です。瀬戸内海を見下ろす丘の上のお墓には、郭沫若の書が刻んであります。

この号の放談室には、1952年の湯川記念館の様子を生き生きと示している資料をのせました。どこに出すために作った報告なのか、私はまだ知りませんが、どなたかご存じの方はお知らせください。

基研には、昨年から湯川記念館史料室が設置され、片手間ではありますが、活動がはじまっています。その一端は、去る3月末の日本物理学会の物理学史分科会の特別講演として、河辺六男氏と私との連名で報告したほか、早川幸男氏が、5月末にFermilabで開かれたInternational Symposium on History of Particle Physicsで、invited talkとして話をされました。これらも、そのうち、活字の形でみられるようになっていく予定です。

素研の誌上にも、ときどき、素粒子論グループの多くの人たちが興味をもつ歴史的資料をのせることも考えてみたいと思います。ご意見があればお聞かせください。

(1980-6-20 M.K.)

この時代の基研は、今と異なり4部門のこじんまりした研究所だった。建物は湯川記念館だけで、のちに広島大学理論物理学研究所と合併した後にできた研究棟はまだなかった。国内外からの滞在者はいたし、Progress of Theoretical Physicsの編集と刊行をおこなっていた理論物理学刊行会も一角を占めていたが、これらの人たちも含めて、所長から教職員、用務員さんまで、遠足も含めて親密な毎日を過ごしていたのだった。

ここに、朝永先生、坂田昌一先生のお墓のことが出てくるが、坂田先生のお墓は柳井市

内の欣慶寺に移転したと聞いた。郭沫若の書の石碑は、ぼくが訪ねた岩休寺の元の場所に
いまでもあるそうだ。これは移せない事情があるのだろうか。移すほうがいいのではない
だろうか。

もう一言。湯川先生のお墓は京都の知恩院にある。

この編集後記では、湯川記念館史料室の活動についてもふれている。ここに出てくる河
辺さんとぼくの報告は、上記 1980 年 1 月号 (60 巻 4 号) の欄に書いた「中間子論の誕生」
にまとめられている。早川さんの報告は、このシンポジウムの記録

The birth of particle physics edited by L. M. Brown and L. Hoddeson, Cambridge University
Press, 1983 のなかの pp.82-107 に

The development of meson physics in Japan

として記録されていて、翻訳が

L. M. ブラウン・L. ホジソン篇『素粒子物理学の誕生』(講談社サイエンティック, 1986)
に、「日本における中間子物理学の誕生」(pp.86~112) として含まれている。

また、湯川記念館史料室の誕生と初期の状況については、河辺さんと一緒に「湯川記念
館史料室私記」(素研 65 巻 4 号, pp.223-237, 1982 年 7 月号) に書いておいた。

8 月号 61 巻 5 号

編集後記 . . .

素研の名前は、海外でも次第に知られるに至っています。最近、仁科記念財団の招き
で来日し、7 月 8 日に東京で、"Tomonaga Sin-itiro : A Memorial Two Shakers of
Physics" と題する講演をおこなった J. Schwinger も、講演の中で素研を引用してい
ますので、御紹介しておきます。

In that same month of September, 1948, Yukawa, accepting an invitation of
Oppenheimer, went to the Institute for Advanced Study, New Jersey. The letters
that he wrote back to Japan were circulated in a new informal journal called
Elementary Particle Physics Research – Soryushiron Kenkyu. Volume 0 of that
journal also contains the communications of Oppenheimer and Pais to which I have
referred, and a letter of Heisenberg to Tomonaga, inquiring whether Heisenberg's
paper, sent during the war, had arrived. In writing to Tomonaga on October 15, 1948,
Yukawa says, in part, . . . (1980-7-23, M. K.)

シュウインガーの講演は、朝永先生の一周忌当日、東京の日仏会館ホールで行われた。
講演記録は、仁科記念財団のウェブサイトの「仁科記念講演録などの NKZ シリーズ」にあ
り、全文を読むことができる。

9月号 61巻6号

編集後記 原稿がたまりすぎている・・・ (1980.8.4 M.K.)

10月号 62巻1号

編集後記 ひさしぶりに薄い素研をつくれて、ほっとしています。・・・今年度は・・・厚い号が続き、1年分の予定ページ数を全部使ってしまったのではないかと思うほどです。・・・値上げをせざるを得ない状況に追い込まれています。(1980.9.16 M.K.)

11月号 62巻2号

研究会報告 ニュートリノの質量

編集部より 素研購読料値上げ・・・

編集後記 OD問題の解決をめざす若手研究者団体連合会がまとめたパンフレット「オーバードクター問題の解決をめざして」が各方面で話題になっています。これが解決への歩みに大いに役立つことを期待します。

TRISTAN計画が動き出しそうな様子です。・・・NUMATRON計画も、動きが見えてきました。・・・宇宙線、素粒子実験、核実験での国際協力が着々と拡大しています。・・・素粒子・原子核の理論研究がとりのこされることのないように期待します。・・・ (1980-10-7 M.K.)

この号には、研究会報告以外にも、ニュートリノの質量と振動についていくつかの寄稿をお願いして掲載した。以下の1981年3月号(62巻6号)の編集後記にあるように刊行直後から注文が殺到し、余分に用意しておいたのに完全に売り切れ、再刊希望に対して、財政的理由からお断りせざるを得ず、希望者には申し訳なかったし、編集部としても残念だった。

12月号 62巻3号

編集後記 素研編集部を強化するため、・・・基研の福田礼次郎氏と鈴木敏男氏に協力してもらうことにしました。・・・この文を書いている11月上旬に、まだ9月号までしか刊行できませんでした。・・・素粒子論グループの有権者は、1,000名を超えています。機関誌にふさわしい発行部数にもっていくため、周囲の方々が、購読者になってくれるように依頼してください。(現在の刊行部数は、図書室用も含めて約700部に留まっています。) (1980-11-7 M.K.)

1981年

1月号 62巻4号

編集後記 新年おめでとうございます。(といっても,) お手元にとどくのは, 1月末
 と思います。 (1980-12-9 M.K.)

2月号 62巻5号

放談室 シリーズ「OD問題と学術体制」第1回

編集後記 今月までうすい号が続きましたが, 次号から研究会報告が連続して登場
 する予定です。 (1981年1月16日 M.K.)

3月号 62巻6号

講義ノート 崎田文二「ゲージ理論と集団場」

編集後記 ……昨年秋から基研に滞在して, 精力的に仕事や講義をしてこられた崎
 田文二さんが, 編集部からの依頼に対し, 数日間で講義ノートを書いてくれまし
 た。……ここで, お礼を述べておきます。

今年の1月号は, 過去10年以上の中ではじめてその月のうちに発行できました。…
 ところで, 昨年11月号の素研は, 「ニュートリノの質量」の研究会報告と, それに関
 係する特集号的な編集をしたところ, 定期購読者以外の注文が多くて, 余分に印刷し
 ておいた予備が全部すぐに売り切れてしまいました。その後も注文がつづいているの
 ですが, 経費がかかって再刊することはできません。……

(1981-2-5 M.K.記)

崎田さん(1930—2002)とは同世代であったこともあり, 別の大学の院生だったときに
 木崎湖での夏の学校で出会ったときから仲よくしていた。ニューヨークでも歓待してくれ
 た。ガンとの闘病を続け, 東京で亡くなったことを知って残念だった。

4月号 63巻1号

編集後記 2月初めに SLAC で……といううわさが伝わってきました。……数日
 ののちつぶれてしまいました。2月下旬には, ドイツから telex がとどき, München
 でおこなった plasma turbulence での実験で, gluon, W^- , Z^0 , e^* , μ^* , τ^* ,
 τ^{**} その他の質量を決めることができたと書いてありました。……丁度基研で開催
 されていた研究部員会議の休憩時間の議論になりました。プラズマや乱流の専門家に
 きいても, 納得のいく説明は得られません。たとえ, 質量のスペクトルが得られても,
 なぜそれらがグルオンなのか, 全くわかりません。……静観することにしましょう。

(1981-3-12 M.K.)

インターネット時代になる前には, 基研には, プレプリントも早く多く届き全国に情報
 を流していた。プレプリントより早く情報が届くことも少なくなかったが, フェイクニュ

ースも時々飛んできた。

5月号 63巻2号

お知らせ 譲る「素粒子論研究」・・・

素研編集部

編集後記 お知らせ欄に書きましたが、雑誌のバックナンバーの譲与が、喜ばれている例があります。・・・素研の誌面の一隅が、このような情報交換に役立つことはいれしいことです。

(M.K. 1981・4・16 記)

この号で、ぼくの編集長の仕事は淡々と終わった。引き継いだのは、また牟田さんだった。

4 勝手連の応援団

ぼくは、1983年に基研から転出した。翌年までプログレスの編集委員の仕事が続き、1985年に京都で開かれた中間子論 50周年国際会議とレプトン・フォトン国際会議の組織委員だったので、基研にはしばしば用事があったが、その後は、基研にも素研編集部にも足が遠のいていた。

それが変わったのは、2000年1月に河辺さんが急逝したためだった。すでに述べたように、基研の湯川記念館史料室は河辺さんとぼくたちが力を合わせて立ち上げたのだったし、後継者は全く見えていなかった。そこで、時を置かずには横浜から京都に行き、史料室の状況の把握を始めた。

そのころ始まったのが、朝永先生と湯川先生という二人の京大出身者の生誕100年が2006年と2007年に続くので、基研として記念事業を行うという、ぼくも参加した計画だった。そのため再び基研にしばしば行くことになった。この計画は、筑波大学と大阪大学も参加して実施された。

時期としてその途中で起こったのが、素研のバックナンバー全文を、国立情報学研究所(NII)の電子図書館サービス「NACSIS-ELS」に搭載するという計画だった。ここで生じた難問は、すべての号を裁断して、機械的に両面スキャンをするため、創刊号からのすべての号を、NIIに送付する必要があることだった。素研編集部の野坂京子さんが、初期の用意できない号があるといったので、偶然の幸運により、そのすべてを提供した。なぜそれが可能だったのか手の内を明かすと、河辺さんの遺言が関係している。2000年に河辺さんが亡くなったときに奥さんの万里子さんから連絡があり、物理関係の処理は梅村勲さんとぼくに依頼するようにと書いてあるといわれたのだった。河辺さんは、素研を創刊号から持っていて、0巻はそれ以前に素研編集部に寄贈していた。そこでそれ以後の欠号をすべて提供できたのだった。

この計画は2008年から、CiNii(サイニイ=NII論文情報ナビゲータ)によって、創刊

号からのバックナンバーの全文が利用できるようになった。

今では、原稿データ（PDF）の保管先は、NII から、JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）に移り、J-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）上でバックナンバー全文が公開されている。

素粒子論研究と物性研究は、長年理論物理学刊行会に全面的にお世話になってきたのだが、Progress of Theoretical Physics と理論物理学刊行会が 2012 年末になくなり、2013 年度から日本物理学会が Progress of Theoretical and Experimental Physics を刊行することが決まった。そこで、両雑誌の冊子体での継続はできないことになり、2011 年度末で終焉を迎えることになった。そこで当時素研の編集にも刊行にも全く関係がなかったのに、冊子体の最終号 2012 年 2 月の 119 巻 4C 号に「素粒子論研究」の 65 年：1948-2012」と題して、オマージュというか挽歌というか、回顧と提案を書かせていただいた^{註2}。（記憶が定かでないのだがこの執筆の構想は、野坂さんと話している中で生まれたのだと思う。野坂さんは、1999 年 11 月号に河辺さんが湯川記念館史料室の名前で書いた「素粒子論研究」の 50 年」に「熱烈協力」されている。再び詳細な付録として「素粒子論研究 100 巻から 119 巻までの資料」を作成してくれた。）

提案というのは最初に書いたように、2008 年から当時の素研編集長だった笹倉直樹さんが発行してきた電子版の素粒子論研究を、素粒子論グループの総会とされている素粒子論懇談会で、素粒子論グループの機関誌として決議して、冊子版のオンライン後継誌として発展させてもらいたいということだった。幸いにしてこの提案は可決され、今日 75 周年を迎えることができたのだった。

なお 冊子体の最終号が出た 2012 年 2 月には通巻 746～748 号の 3 冊が刊行され、合計 544 ページだった。

5 あとがき—久しぶりの編集委員—

2009 年に、当時の素研編集長だった笹倉さんによって創刊された電子版の素粒子論研究は、2012 年の初めまで冊子版とは別の雑誌とされていた。それでも笹倉編集長も編集作業に協力していた野坂さんも、冊子体と電子版の双方を作成していた。

2012 年 3 月の素粒子論懇談会で、上に述べたように、その後は電子版の素研を素粒子論グループの機関誌とし、素粒子論グループが編集長と素粒子と原子核の分野から一人ずつの編集委員を選出することになった。

2015 年に編集長になった橋本幸士さんは、素粒子論懇談会が選出した 2 人の編集委員

註2 素研は、2007 年度から隔月刊で年 6 回発行、2010 年度からは季刊で年 4 回発行だったから、2011 年度の最終号の発行は 2012 年 2 月だった。

のほかに、編集長が数人の編集委員を委嘱する体制を作った。このときにぼくも委嘱された。2021年からの現編集長の森田健さんにも継続してお手伝いすることになった。

過去の経験があるので参考にしてもらえることがあり、今回の75周年記念企画について具体的に数件の依頼と編集を担当したことを含めて、ささやかな貢献をさせていただいて、今日に至っている。

振り返ってみると、実に多くの人たちと協力して素研と取り組んできたものである。まだまだ思い出すことが出てくるが、素粒子論研究が今後も素粒子論グループの機関誌として魅力を持ち続けることを希望して筆をおく。

貴重な情報を提供して下さった岡本良治さんと、原稿を点検してご意見をくださり、分かりやすく正確にすることに貢献してくれた松田正久さんと野坂京子さんに感謝する。

(2023年10月15日)